



障害を持つ幼児の保育(29)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

この子と生きるうえで大切にしてきたこと(1)

この子に『惚れ込む』

M 障害を持つ子どもに付き合っていると『惚れ込む』という言葉がぴったりするのです。

F この子に『惚れ込む』というとずいぶん過激

に聞こえますけれど……。

M この子を愛する、この子と楽しむ、などいろいろの言葉や表現があるけれど、私の付き合ってきたお母さんの中には、『惚れ込む』というのが一番ぴったりくる人が何人もいます。かわいいと

いう情だけでなく『惚れ込む』という言葉には尊敬が含まれているように思います。この子の持っている感性やひとつのことに熱中する姿勢に、尊敬と愛情を持って支えながら生きてきたのです。

F そう、尊敬と愛情ですね。

電車のことなら実によく知っている子、箱が大好きな子、会社の名前を知っていていくらでも書ける子、など何人もの子どもの顔が浮かんできます。確かに魅力的ですよ。

M だからといって『○○が出来る』ということにだけ尊敬をはらうのではないですね。ひとつのことにわき目もふらず夢中になる姿勢が、私たち大人の心を打つのでしょうか。周りの人からどう見えるかを気にしながら大人たちは生きているから……。

愛育学園にはたくさんの方が実習にきてくれます。何年もボランティアを続けている人もいます

が、この子たちの素朴なひたむきさに惚れ込んでいるのだと思いますよ。

F ひとつのことに熱中することを自閉症の特徴として否定的に見る人もいます。

M 他の人とコミュニケーションが広がらないとか、もっと役に立つことを学んでほしいと考える人もいます。しかし、長い年月で見たらかえってその個性のせいでいろんな人から認められ、自信を持つてやる安定感が出来てくるのです。

この子の願っていることを理解し、

かなえてあげたいと思う親、保育者

F 『惚れ込む』という言葉からすぐ頭に浮かぶのはS君とその家族、とくにお母さんのことです。S君は初めての子で、お母さんは実にまじめに子育てに取り組んでいました。分かりにくいS君の心を理解しようとするお母さんは、私たちが



いつも言っている『子どもの側に立って考える』
ということを身につけ、実行していました。

S君が愛育の家庭指導グループに参加したのは
五歳位だったと思います。

M そうね、そのころ職員室から新しいクレヨン
や折り紙を教室にもって来て、スーパーの陳列棚
のように並べました。スーパーの店員さんのよう
に空いた段ボールの箱はつぶしますが、その仕事
はお店の人とそっくりです。でも、そんなに沢山
新しい教材の文房具を全部だめにしたらどうしよ
うと、私にはためらいがありました。他の人の目

も気になり私の心も揺れていました。S君はお店
の人と同じようにやるのですから、決して汚した
りしないことが分かってきて、他の人からも認め
られるようになりました。

F 学校から家に帰る途中、ターミナル駅のデ
パートでクッキーの詰め合わせの大きなものや、
お茶や缶の詰め合わせなど、立派なものをほしが
るようになりました。とつても高価なんですよ。
そのうちS君の家の表通りにごみの集積所が出来
て、贈り物の季節には缶や箱が出されるのを二階
の窓から見ている、汚れないうちに取ってきて集
めるようになりました。

本当の願いを

現実の中で実現する方法を丁寧に探す

M この展開で子どもの願いにそってやることが
大切だと自信を深めました。大人たちもS君の好

きな缶や箱をとっておくようになりました。毎日のように買っていた缶入りの高価なクッキーは、買わなくてもよくなりましたが、次にはデパートのショーケースに関心を示したのです。

F そう、そのころお母さんはどうしたらいいか疑問に思うことを、私たちに度々話してくれました。私たちにとっても思いもよらない出来事を考えるチャンスになりました。

M そういう意味では職員も親も研究者も同等に話し合いました。

F S君がショーケースに並々ならない関心を示しているうち、ついにお母さんのドレッサー（縦長の三面鏡）に目をつけ、これを使って自分でショーケースを家の中に作ってしまいました。いい具合にドレッサーには蛍光灯もついていました。

M 本物みたいだね。そのころのS君は美しい商

品の並んだお店を、自分の手で作ることを目指していたのでしよう。やっとそのことが分かってきました。その途中ではガラクタやごみのようなものをいっぱい抱えて、私に半分もつてくれと言われて閉口したときもありました。

ともに生きることが楽しくなってきた

F 家ではS君がいろいろ持ち出すといけないので納戸との境のドアは閉めていたそうですが、このころからお母さんはドアのカギを開けました。

そのときのお母さんの言葉がいいのですよ。『カギを閉めると向こう側にはここよりも、もつといいものがあると思つて執着が強くなる』というのです。

こうしてカギを開け、部屋に缶や箱を並べる棚を作りました。おかしいことに、缶や箱の中には家族の下着や靴下などがしまわれていて、S君に

断らないと取り出せないという時期もありました。でもそんな話は困ったこととして語られるのではなく、大笑いしながら話し合うようになりました。

M S君は愛育の小学部を卒業すると、公立の養護学校中等部から高等部へと進み、現在は福祉作業所に通いながら、陶芸や造形教室やその他の活動を積極的にやっています。

子どもが自分からやり始めたことは

意味がある

M このことは私がいつも言っていることです。が、その意味がすぐ分かることもあれば長い期間かかって見えてくることもあります。

S君が後になって小さな箱作りを始めたことで、みんな驚かされました。箱の蓋と身がびつたりとあって、美しい千代紙が張ってあります。寸

法はまったく計らないのですから、どうやって蓋と身がこんなにうまく合うのかは分かりません。

F そんなに美しい小箱を私たち女性にプレゼントしてくれるのです。それぞれの人に合った色のものをくれることには感心します。箱をとおして人とのやり取りがうまく成立するのです。最近ではお父さんやお母さんと三人で小旅行に行くのを楽しみ、わが家でやっている造形教室へのおみやげには箱に入ったお菓子を買ってきてくれます。

M でも中のお菓子はみんな食べ、箱や包装紙や紐にいたるまで丁寧に持って帰ります。箱が好きなのは変わりません。

F 青年となって変わったのは帰るとき『次の造形教室は何月何日、来るときは一人、帰りも一人』と歌うように唱えていくことです。お母さんと一緒ではない自分の世界を確認しているのだと思います。

M いまS君のことを話しましたが、どの子もそれぞれに素敵なものを持っていて、その子に惚れ込む人がいます。

『気になること』から『惚れ込むこと』へ

F S君の成長を長い期間かわりながら見てくると、最近保育の現場でいわれる『気になる子ども』ということが私には気になってくるのです。いわゆる普通の子にくらべて偏りがある子を『気になる子』として相談所や病院に行くようにすすめ、自閉症とか、軽度精神障害とか、○○症候群などの診断を受けることになりました。そこではどう育てるかについては触れません。

M それじゃあ親たちや心ある保育所は困惑してしまいます。この子のことが気になるならこの子の世界に関心を持ち、この子の側に立って理解し支えることが必要でしょう。どの子も幼児期には

いくらかの発達の偏りがあります。

F それを心得て普段の生活の中でこの子の思いを大事にし、丁寧に関わっていくことが家庭であり専門の保育機関でしょう。

M その中でひとつのことに夢中になったり、本気でおもしろいと思ったことを繰り返す子のひたむきさを私たちが否定せずに受け入れたいと思います。愛情と尊敬を受けた子は、自信をもって表現し生きることが出来るからです。発達の偏りを『気になること』から『惚れ込んで育てること』へと変わること願っています。

(保育研究者)